

2021年11月21日（日）

＜収穫感謝・謝恩日礼拝＞

宣教 『神を信じたニネベの人々』

テキスト：ヨナ書3章1～10節

今日は、収穫感謝・謝恩日の礼拝をこのように捧げることができますことを主に感謝いたします。皆様の上に主の平安をお祈りいたします。収穫感謝日は、ご存知のように秋の収穫を神さまに感謝する時です。旧約聖書時代に収穫を神さまに感謝する起源はありますが、日本に伝えられたのはイギリスから現在のアメリカ合衆国のマサチューセッツ州のプリマスに 1600 年代の始めに宗教的自由を求めて移住して来たピルグリムと呼ばれる入植者の一団が、本国イギリスから持ってきた種子などで農耕を始めたところ、現地の土壤に合わず飢饉による餓死者まで出したところ、アメリカ先住民の助けにより危機を脱して作物の収穫ができ、そのことを神に感謝し、その感謝を表す目的で 1621 年、今から丁度 400 年前に先住民を招いて収穫を祝う宴会を開いたことにあるとわれています。日本には「木守り柿」（きもり柿、きまもり柿）の習慣の地域があるようです。柿のシーズンが終わる時、実った柿の実を少し木に残しておくそうです。木に対する感謝と鳥や生きものへの感謝の思いからだとのこと。良い事だと思われ、修禱館（牧師館）の裏庭のイチジクの実も今年も少し残しました。

また今日は、日本キリスト教団では信徒の方々の祈りと発案と奉仕により謝恩日とされ儲けられた日で、長く牧師として務められ、隠退された牧師を覚えて守られています。具体的には、隠退された牧師の老後を支える謝恩日献金を捧げています。

今日は先週に続きヨナ書3章を学びたいと思います。

小見出しには「ニネベの悔い改め」とあります。アッシリア帝国の首都であった大きな町ニネベの人々が悔い改め、神さまに立ち帰ったことが記されている場面です。

1:主の言葉が再びヨナに臨んだ。

海の底で大きな魚に飲み込まれたヨナが、陸地に吐き出され主の言葉、神さまの言葉が再びヨナに臨みます。

2:「さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ。」ニネベの町に行くこと、神の言葉を語る事がヨナに伝えられます。

3:ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った。ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。

以前は神の言葉に背いたヨナも苦難の経験と救い出された体験から、今度は神の命令どおり、「直ちにニネベに行った。」のです。この「直ちに」とは、時間的な問題ではなく、ヨナの心のあり方、「ニネベには行きたくない。」と欲していたヨナの心が変わった、ヨナの本心はわかりませんが、このことは、ヨナは、自らの意思で決断して神の言葉に従ったのです。これは良かった、と思います。ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかったと記されています。どれぐらいの大きさでしょうか。とても大きな町であったことが言われているのだと思います。

さて、ニネベに入ったヨナがやることは、決っていました。

4:ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そして言った。

「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」と。40という数字は聖書では事が成ることを表しているようです。

ヨナのモデルは紀元前8世紀頃の人物のことだと思われます。ヨナは、神の言葉をニネベの人たちに伝えるという神さまからの使命に生きたのです。「使命とは、命を使う」と書きます。昔、聞いたことばで、「思想家は死に場所を探して生きる。」と聞いたことがあります。少しオーバーな気もしたのですが、確かに与えられた自分の命を、これから先、どこで、何のために使って生きるのか、と、何か自分に大きな変化が起こった時など、誰でも考えることあると思うのです。皆様はいかがでしょう？日常のことをこなすことで、精一杯という時もあるでしょう。

5:すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。

さて、ヨナの悔い改めを勧めることばを聞いたニネベの人々は、それに従います。ここで「神」という言葉は、「主」とは書かれていないので、聖書の神ヤハウェではないのかもしれませんが。「断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。」。彼らのやり方で、事態を恐れて悔い改めたのです。大人も子どもも、身分にかかわりなく、断食と、粗布を身にまとったのです。ニネベの町の人々の悔い改めは、ニネベの王にも伝わりました。

6:このことがニネベの王に伝えられると、王は王座から立ち上がって

王衣を脱ぎ捨て、粗布をまとして灰の上に座し、

「王衣を脱ぎ捨て、粗布をまとして灰の上に座し」という行動も、懺悔、悔い改めの行動です。灰をかぶる。死を想像すると共に、「灰かぶり姫」と呼ばれた白雪姫の物語を想像します。

王のとった行動は、

7:王と大臣たちの名によって布告を出し、ニネベに断食を命じた。

「人も家畜も、牛、羊に至るまで、何一つ食物を口にしてはならない。食べることも、水を飲むことも禁ずる。

8:人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのこの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。

「人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。」。「おのこの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。」 神に祈ることと、悪を離れる行動です。

現代人はどうするのでしょうか？ 新型コロナウイルスのパンデミックの影響下の中で世界が問われていますし、今後とも問われていくことでしょう。

「神に祈ることと、悪を離れる行動です。」。聖書のことばで言えば、主なる神に憐みを求めて罪を告白して祈る事、また悪を捨て、悪の反対である、善でつながって行くこと、助け合い、分かち合って行く道ではないでしょうか。このことは可能でしょうか。自分の国だけが、自分たちだけが良ければそれで良い、では世界の状況は良い方向に行くのは難しいと思われます。

主の愛の元では人種間の差別などはないのです。主の憐みはすべての人に及ぶのです。今、気候変動や、世界的飢餓の時代、世界的な危機にある時、人類は助け合わないと遂に滅びの道を行くのだと危惧します。

ニネベの王の姿と言葉に救われるヒントがあるかもしれません。

「人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。」。「おのこの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。」との叫びです。

9:そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。」とニネベ町の崩壊の危機の中、町の人々に叫び、訴えます。大切なことばがあります。「神が思い直されて」。ということばです。

旧約聖書の神さまは、思い直される神さまなのです。人間の態度次第でご自身の思い、計画、行動を思い直されるお方なのです。

創世記に記されたノアの時代には、人々は悪から離れることは遂になく、大洪水によって地は滅びました。イスラエルの指導者モーセは、民のためにとりなしの祈りを神によく捧げました。

ニネベの町の人々は、町の崩壊というヨナの言葉を聞いて、それを信じて、態度を変えたのです。具体的に悪から離れたのです。

良きにつけ悪しきにつけ、人間は恐怖に弱いのです。

恐怖は人間に行動変容をもたらします。わたしたちもコロナウィルス感染下で体験して来たことです。

10:神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣

告した災いをくださのをやめられた。

思い直される神さまの行動は、遂に時至って、独り子イエスをこの世に与えるということでした。神さまの憐みは、人間の罪を世界をも包んで行くのです。

まことの愛は、イエス・キリストの十字架によって神さまから既に与えられているのです。わたしたちの犯す罪の赦しは、主イエスの十字架によって赦されているのです。後は、悩みながらも、話し合い、考えながら、主に祈りつつ、互いに助け合って分かち合って生きて行くことが課題なのです。

これから先、わたしたち人類は地球の気候変動や資源を巡って、具体的な対策をとっていけるのでしょうか、主の祈りあるように「わたしたちを誘惑におちいらせず、かえって、悪からお救いください。」と祈りながら、神さまの憐みを感謝し求めつつ、この地球を大切に、世界中の人たちと心をつないで分かち合って生きる道を求め続けたいと願います。

◆ニネベの悔い改め

- 1:主の言葉が再びヨナに臨んだ。
- 2:「さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ。」
- 3:ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った。ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。
- 4:ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そして言った。「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」
- 5:すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。
- 6:このことがニネベの王に伝えられると、王は王座から立ち上がって王衣を脱ぎ捨て、粗布をまとして灰の上に座し、
- 7:王と大臣たちの名によって布告を出し、ニネベに断食を命じた。
「人も家畜も、牛、羊に至るまで、何一つ食物を口にしてはならない。食べることも、水を飲むことも禁ずる。」
- 8:人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのこの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。
- 9:そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。」
- 10:神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくださのをやめられた。